



市立美術館での展示風景



服飾デザイナー 浜井 弘治 さん

世界のトップデザイナーを輩出してきた日本を代表するファッションコンテスト「装苑賞」を受賞し、パリコレのスタッフなどを経て、下関に帰郷。現在は「残糸シャツ」「和紙デニム」「Origami Sewing」など、下関からユニークな発信を続けている浜井弘治さんをご紹介します。



▲三宅デザイン事務所で働いていたときの浜井さん。ファッション雑誌「装苑」1992年より。

デザインの未来を考え、下関から世界へ洋服に囲まれて

下関で漁業が盛んだった時代に、浜井さんの両親は仕立て屋でした。生まれた時から洋服にあふれた家で、小さい頃、浜井さんは見よう見まねで洋裁をしていたそうです。DCブランドブームが来たとき、浜井さんは高校生でした。ファッションにとっても興味を持ち、メンズファッション誌を読み、アルバイトで貯めたお金を全部洋服に使っていました。浜井さんは将来を考え、本当に好きなことをしようと思いい、服飾を学べる文化服装学院へ進学します。

「イツセイミヤケのコレクションを見て衝撃を受けました。この仕事に携わるにはどうしたらよいかを考え、装苑賞（日本を代表するファッションコンテスト）を目指すようになりました」と浜井さんは学生時代を振り返ります。

昭和62年に目標だった装苑賞を受賞。これを機に、浜井さんはイツセイミヤケのコレクションをデザインする三宅デザイン事務所に入ることができました。「三宅デザイン事務所では、数千冊はある画集、写真集を常に頭に入れる必要がありました。突然三宅氏より『3日後に50枚デザイン画を書いてきて！』と指示されるような多忙な日々でしたが、この期間にデザイナーとしての基礎体力を養うことができました」と浜井さんは楽しそうに話します。

その後独立し、世界的な現代演劇演出家の小池博史さん



▲東京オリンピック・パラリンピック関連事業「東京2020 NIPPONフェスティバル」共催プログラム「完全版マハーバーラタ〜愛の章／嵐の章」で浜井さんがデザインした舞台衣装。



まちかどボイス

今月のテーマ
秋に食べたい物



▶和紙を素材にしたTシャツと残糸(生地を作るときの端材)を素材にした靴下。「SDGs(持続可能な開発目標)の追い風もあり、和紙を使った素材が注目されるようになりました」と浜井さん。未来を考えている浜井さんは、いち早く和紙の素材でデザインをしていました。



◀うるとらはまいデザイン事務所にて。デザインし、自ら縫製し、服を作ることありますが、提携している工場に縫製を依頼することもあります。

▶市立美術館特集展示「デザイナー浜井弘治 舞台のしごと」の関連イベントにて。「プレゼンテーションをするとき、新しいこと、1歩先のことをして感動させることをしたい。」と浜井さん(左)。「3歩先くらいです」と小池さん(右)。



という考えからです。

と出会い、舞台衣装を手掛けるようになり。デザイナーにも二通りあり、言った通りにしてくれる人と全然違うことをする人がいる。浜井さんは後者。浜井さんの中でさまざまな変換作業がなされるので、付き合いが長くなりました」と小池さんは浜井さんについて話してくれました。

か期待が膨らみます。

「例えば、日本家屋に和紙が使われているのは、水分を吸って吐き出す和紙の呼吸機能が、高温多湿な気候に合っているからです。こういった、一見、伝統のようで未来的な機能を利用して、ジーンズ、ポロシャツ、ソックスなどを中心にデザインしています」と浜井さん。

デザインの未来

浜井さんは、伝統から生まれた民俗の知恵に日本の未来が見えると考えています。

編集後記

■下関から世界へ、新しいファッションを発信している浜井さんのお話を伺い、下関にもいろいろな可能性があるのだと感じました。(ひ)
■一人ひとり、できることは違います。できること、苦手なこと。お互いに思いやりをもってみんなが活躍できる社会でありたいです。(み)
■醸造工場の取材後、みそ・しょうゆの食欲をそそる香ばしさに「無性にお米が食べたくなるね」と取材班の意見がそろいました。(に)